

SOS

人と繋がることで
自分をコントロールできる人もいる
後戻りできない道に踏み込んでしまう前に
助けてって叫んで
全てを失う前に

人と繋がることで
自分の弱さを見せられない人もいる
プライドが高くて
弱さは人に見せるものじゃないと
教えられたのかもしれない
弱さを見せ合うのは
ただの慣れ合いに過ぎないのだと

人と繋がることで
自分の弱さを見せられる人もいる
どんな姿でも受け止めて欲しくて
泣いたら抱きしめて欲しいから
弱さを見せて 全てさらけ出せば
ずっと 繋がりは消えない

生きていく中で
そう感じ取った人も
きつと中にはいる

この世の全てに絶望して

明日 命を終わりにしようとしている人

明日 私 死ぬから

誰かにそう 打ち明けている人

本当は止めて欲しくて

想いを言葉に変えている

それは

まだ生きたいと願う

心の叫び

だから 生きて

お願い 生きて

生きること疲れて

一人で全て 背負い込んで

誰にも言えずに

誰にも頼れずに

叫ぶことも忘れて

命を自ら消す人もいる

残された人々に

一生 消えない傷をつくる

私の周りには誰もいない

そう 孤独を感じているかもしれない

それは違うよ

見えていないだけ
見えなくなっているだけ

もう一度 周りを見渡して

疲れたって言っているんだよ
助けてって言っているんだよ

あなたはひとりじゃない

人と人は

必ず どこかで繋がっているから

あなたの叫びに気づいて
手を差し伸べてくれる人
あなたの叫びに気づいて
一緒に乗り越えようとしてくれる人

私は気づけたの
ひとりじゃなかったと
手を差し伸べてくれる人がいた

ほら 深呼吸して

周りをもう一度 見渡して

あなたの心の叫び

気づいてくれる人が

必ずいるよ

エブリシング

何もない世界
色のない世界

自分の体がただ存在するから生きているだけ
生かされているだけ
心と体は バラバラ
そんな毎日が
この先もずっと続くと思っていた

あの日
あなたに出逢えて

私の世界に初めて色がつき始めた

二人で過ごす時間が
何よりも幸せで

「安らぐ」ということ

あなたが教えてくれた

私の世界にもっとたくさんの色がる

これからは

そんな毎日が送れるんだ

そう思っていたのに

寝ていると思って起こした

あなたの体は

すでに 冷たくなっていた

大好きな大きい手

たくさんの表情 教えてくれたその顔

もう 動かない

あなたは最期に

何を想ったの？

何を考えたの？

ベッド横にそっと置いてある見慣れた文字

声のない最期の手紙

また明日ねって言ったのに

あなたの苦しみに気づけなかった

あんなに一緒にいたのに

あなたの心の叫びに気づけなかった

突然 失われた二人の未来

取り残された私は

これからどう生きればいいのか？

あなたに出逢えたから

この世界に希望が持てたのに

あなたが居るからこの世界を好きになれたのに

私はあなたの何を見ていたのだろう

あなたを知ったつもりで

本当は 何も見えていなかった？

あなたの抱えている闇に気づけなかった

私とでは
二人の未来 描けなかったの？
あなたと過ごす その瞬間が
私にとっては 何より大切に
どんな高価な物よりも
宝物だった

すべてが愛おしかったのに

眠りにつく前に

私を思い浮かべた？

残されてしまう私のこと

考えてくれた？

色づき始めた世界が

また 色を失っていく

あなたのいない空白の世界を

これから どう埋めていけばいいの？

あなたに出逢えて 絶望を忘れたのに

あなたはどこで 絶望を覚えたの？

雨やどり

廣瀬 さくら

安らげる場所が欲しかった

扉あけたら

「おかえり」と迎えてくれる

あなたの笑顔に 逢いたくて

あなたの温もりに 触れていたくて

その温もりに 癒されたくて

花火が夜空に上がる

夏のお祭りで

あなたと出逢った

「好きならだけいればいい」

あなたのその言葉に甘えて

二人の生活が始まった

あなたの住む場所に

私の部屋が生まれた

「帰りたい」

そう思える居場所が

今の私にできた

いつぶりだろう

誰かの温もりに触れられる喜びを
感じられたのは

一緒に買い物して

同じ場所で仕事して

あなたの飲むコーヒーの甘さ 覚えて

お互いの好きな曲

肩寄せ合って聴く 一日の終わり

そんな毎日に

愛おしさ覚えた

そして

あなたに恋をした

想い合えていると思ったのに

曖昧なあなたの態度がわからなくて

あなたの心が見えなくて

時に苦しくて

時に切なくて

それでも

あなたに包まれていた時は

愛されていると思えた

私から切り出す勇気が持てなくて

あなたの言葉 待っていたのに

いつまでも 何も言ってくれないから

あなたから離れようと決意した

二年目の夏の夜

花火が 滲んで見えた

あなたは止めなかったね

私が去って二ヶ月で

私の部屋だった居場所は

違う誰かの居場所になっていた

あなたにとって私は

それだけの存在

私はあなたの温もりに

少しの間

雨やどりしただけ

あなたと過ごした二年は

決して 無駄ではなかった

あなたの温もりに出逢えていなかったら

私は今でも

孤独を抱えて彷徨っていた

あなたの優しさと温もりに

私はもう一度

光を掴むことができたよ

ありがとう

あなたを好きになれた

そんな自分を

誇りに想う